

会長就任から半年たって

東京工業大学

河内 宣之



2012年9月より、中川和道先生の後を受けて会長に就任いたしました。私は、放射線化学でいえば周辺人です。これまでの先輩会長の方々とは異なる視点で会の運営に当たれ、との思召しと理解しております。さて多くの会員の皆様にとって本会は“第二学会”ではないかと推察いたします。つまり、もっと大規模な学会に入っておられて、その上で本会にも入会されたと想像しています。私もその例にもれません。このような第二学会、つまり分野がフォーカスした、したがって中・小規模の学会の運営はどこも非常に困難なようです。本会もその例にもれず、長期的に会員数が低下しております。かつては400名を超えていたと思うのですが、最近では300名を切ってしまいました。また賛助会員数も経済状態を反映して低下しつつあります。もちろん頭数が多ければよいという訳ではありませんが、数は力なりは一面の真理です。低下傾向に歯止めがかからないのは、危機的状況と言えます。

そこでその理由を考えてみました。おそらくは求心力の低下でしょう。私の学生時分は、放射線化学にどっぷりとつかっていました。当時は、生成物分析法にとって代わる新兵器（例えばパルスラジオリシス法）が続々登場し始めたこともあり、多くの会員が興味を持つ“中心的課題”なるものが、いくつも存在していました。放射線化学討論会では、その中心的課題をめぐって、喧々譁々の議論が繰り返されました。これが求心力として働き、多くの会員を引き付けていたようです。ところが分野の成熟、あるいは細分化とともに多くの会員の興味を引き付ける強烈な課題が次第に消えてしまい、求心力の低下へとつながってしまいました。いきおい放射線化学全体を見通せる人がいなくなってしまうました。このことは、放射線化学に限ら

ずどの分野でも同じことでしょう。

では、そのような現状を踏まえて学会はどのような役割を果たせばよいのでしょうか。おそらくそれは情報交換ではないかと思えます。IT技術の進歩により、かつてに比べて信じられないほどの量の情報が、すさまじいスピードで流通しています。一見進歩したように見えますが、でもそのほとんどの情報は見ても見なくてもよいものがほとんどです。その中で、良質の情報をできるだけタイムリーに共有することのメリットは大きなものがあります。とくに研究と教育の環境が日々厳しさを増す昨今では、なおさらです。個々の力は大したことはなくても、それを束ねていけば大きな力になります。それを実現するには、やはり良質の情報を会員全体が共有することが第一歩です。もちろん、ITによる情報交換には多くの欠点があります。むしろ顔を突き合わせての議論の方がはるかに有益です。このあたりに放射線化学討論会のもう一つの役割に期待したいところです。

という訳で、これからは情報の流通と共有化に意を配ることを念頭におきたいと存じます。そこで本会ホームページの“国際会議・シンポジウム”欄をご覧ください。第15回 International Congress of Radiation Research が2015年5月23日から29日の予定で京都で開催されます。放射線研究という観点で見れば最も大きな国際会議と言えるかもしれません。本会としてもサイエンスの面はもとよりですが、運営の面でも関与が必要です。この点でもこれから情報を共有していきたいと存じます。

さてもう一つは、中川前会長が着手された日本放射線化学会各賞の改革です。本会ホームページの“学会について”欄をご覧ください。その下の方に各賞の受賞規定が掲載されております。御覧になると、必ずしも本会の現況に合致していない点があることに気がつかれると存じます。賞の授与は本会のスタンスを明確に示すものですので、きわめて重要です。慎重な議論が必要ですので、改革は道半ばですが、ぜひより良い

Message from the President

Noriyuki Kouchi (Tokyo Institute of Technology),
〒152-8551 東京都目黒区大岡山 2-12-1-W4-4
TEL: 03-5734-2611, FAX: 03-5734-2725,
E-mail: nkouchi@chem.titech.ac.jp

ものにしたいと存じます。

冒頭に述べましたように私は周辺人ですので，不案内な点がきっとあります。しかし，メリットとしてそのぶん客観的に本会を見ることができるとも

ん。不案内ゆえに勝手なことを言って波風を立てることも多いかもしれませんが，派手ではないが地道な改革を模索していきたいと存じます。